

# 幼稚園教員養成におけるメンタリング —— 育ち合う三者（養成大学・幼稚園・学生）の関係 ——

佐々加代子・大出美知子・金田利子・鈴木慎一郎

2007 年度に東京学芸大学と白梅学園大学との共同コンソーシアムによる「幼稚園教員養成メンタリング」研究プロジェクトに引き続き、白梅学園大学のみが継続的に教育プラクティスを実践した。

今年度の3年生の参加は編入生2名であった。一人は教員経験者であり、一人は幼稚園教員免許取得をこれから始める学生であった。ともに研究をすすめる園は昨年度に引き続きの2園であった。昨年度研修に参加した4年生は5名がその後もFCの在室場所に出向き、その後就職に向く以前のところで参加した。メンターになった教員は新たな学生との出会いのなかから、個別の抱える悩みについて丁寧に対応してくれており、昨年度の経験が生きていると思わせる内容のさまざまが伺われた。研修学生は幼稚園教育とのかかわりについてがかなりことなるものの、現場での細やかな教員たちと子どもたちとのかかわりをもつ6ヶ月のあいだに、自らの体験に加えて質的に加えていく体験がみえてきたことと、初めてに近い一人の学生については、幼稚園教育がどのようなことなのかについての理解がかなり深まっていたということが変容過程の中から見えてきた。

今年度のFCは、その果たす役割については昨年度と変わらずとしながらも、継続的に引き受けてくれたメンターにおいても、学生についても教員もともにこの研究システムによって育ちあえているということを感じ取ってきた。個別対応のなかのさまざまな対応は、一人の学生の幼稚園という場において経験したことが、さらに生かされていくメンターの存在とそのかかわりが、FC自身については、学生たちとの個別対応のなかで、「支援」という言葉にふくまれてくるさまざまな

内容を見出したことがあげられるという。これはまた、4年生の変容過程に目をみはるものがあったという。FCが在室しているということで話せること、聞き手としていることで本人みずからが問題解決の方向性を見出していくという過程がいくつもみえたことなど。研究システムの効果ということになるのか。

このような研究実践を三者で継続的に積み上げていくことは、個別性のみならず、養成課程におけるさまざまな解決しにくい課題解決の糸口にも繋がっていくようにも思えてきているという。

本年度は、諸研究成果との関係における本研究の独自性や学生の個別性や共通性についての検討が残ってしまった。今後とも研修参加学生を募りながら、継続的に実践が可能になれば、その実践年数だけつみあげて検討できることが増えてこよう。

4年制大学における幼稚園教員養成は、まだ始めての卒業生を送り出したに過ぎない。4年生においては、幼稚園のみならず、保育関係にも進んだものがある。どの場においても保育実践における質的資質が問われてきている。フォローアップ研究とリカレント教育も加えて、本研究の果たす役割を明確にしていくことが、養成側にもとめられるのではないかととらえている。

いただいた研究助成金は、FCの報酬と、資料代に使わせていただいた。FCは共同研究者であるものの、この役割は本研究には欠かせない。専門的領域ということで、先の研究においても報酬費が必要不可欠なものとして位置づけられていたことをつけくわえさせていただく。